映像が音楽の感情価評価に与える影響

—気分誘導の観点から—

○石川遥至¹・越川房子²

(¹早稲田大学大学院文学研究科・²早稲田大学文学学術院)

キーワード：映像，音楽の感情価，気分誘導

Effect of movie on affective value of music

Haruyuki ISHIKAWA¹ and Fusako KOSHIKAWA²

(¹Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, ²Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

Key Words: music, movie, mood induction

目 的

映像が音楽の感情価評価に及ぼす影響を，音楽・映像の同時呈示(I群)，映像の後に音楽のみ呈示(II群)，音楽のみ呈示(III群)，の3つの群の比較によって検討する。

方 法

1. 実験協力者：早稲田大学の大学生 41 名(男性 18 名，女性 23 名)。平均年齢は 21.00 歳($SD=1.14$)であった。
2. 刺激：音楽は谷口(1998)から，ニュートラルな刺激としてショパン作曲のピアノ曲『12 の練習曲 作品 25』より第 11 番イ短調《木枯らし》を使った。映像は，映画『チャップリンの駈落』より，冒頭 3 分半の映像のみを抜粋した。音楽・映像はパソコンとヘッドホンで呈示した。
3. 尺度：気分測定尺度として，多面的感情状態尺度（以下 MMS）・短縮版（寺崎・古賀，1991），音楽の感情価を測定する尺度として，音楽の感情価測定尺度（AVSM）（谷口，1995）を用いた。
4. 手続き：まず全群で MMS を測定した。続いて，I 群では映像・音楽を対呈示し，AVSM，MMS を測定した。II 群では，映像を呈示して MMS を測定，次に音楽を呈示して AVSM，MMS を測定した。III 群では，音楽を呈示して AVSM，MMS を測定した。

結 果

1. AVSM 得点：AVSM 得点について群（被験者間要因）×下位尺度（被験者内要因）の 2 要因分散分析を行った。交互作用および群の主効果は有意ではなかったが，群間では以下の特徴がみられた。①下位尺度「軽さ」の得点は I 群が II・III 群より 2 点ほど大きかった。②その他の尺度では I・III 群の得点差は比較的小さく，II 群の得点は「高揚」「親和」で両群より低く，「荘重」では高かった。
2. MMS 得点：下位尺度ごとに，群×測定時の 2 要因分散分析を行った。①実験開始時から音楽聴取後の得点推移を比較したところ，「敵意」尺度で交互作用($p<.05$)が有意となり，II 群における測定時の単純主効果のみが有意($p<.01$)で音楽評価時で上昇していた。②同様に実験開始時から刺激（映像＋音楽，映像のみ，音楽のみ）呈示時の得点推移を比較したところ，「活動的快」では，有意差はないものの I 群では 1 点減少，III 群では変化がなかったのに対し，II 群では 1 点増加

した。「親和」では交互作用($p<.01$)が有意であり，I 群における回の単純主効果($p<.01$)が有意で II 群のみ上昇した。

③各群内で測定回（1-2 回目，II 群のみ 1-3 回目）×MMS 下位尺度の 2 要因分散分析を行ったところ，II 群の交互作用($p<.001$)が有意であり，下位尺度「非活動的快」「集中」($p<.05$)，「親和」($p<.01$)における回の単純主効果が有意であった。そこで Bonferroni 法で多重比較検定を行ったところ，「倦怠」「集中」は 1-2 回目，「親和」は 2-3 回目の間で得点が有意に低下した($p<.05$)。

考 察

1. 映像による気分誘導：結果 2-②，2-③から，映像によって気分が誘導されたことが確認された。しかし結果 1 より，これによる音楽の感情価評価の有意な変化は見られなかった。
2. 同時呈示時の感情価評価：映像・音楽を同時呈示した場合と音楽のみを呈示した場合で音楽の感情価評価に有意差は見られなかった。しかし結果 1-①，2-②，そして「軽さ」と「活動的快」が近似の下位尺度と考えられることから，音楽の感情価評価が同時呈示した映像の印象評価，あるいは映像が誘導した気分誘導に誘引される可能性が示唆された。
3. 継時呈示時の感情価評価：結果 1-②より，映像の後に音楽を呈示した場合には，音楽の感情価がより重々しく，厳かだと評価される傾向があった。結果 2-②から映像は「活動的快」気分を誘導したことが確認されており，音楽の感情価評価は映像の気分誘導の影響を受けず，それとは別のプロセスによって変化したと考えられる。例えば，継時的呈示により映像と音楽の感情価の対比が起こり，音楽の感情価下位尺度のうち映像の感情価と相反する尺度の得点がより強調されて評価されるというプロセスである。

4. 映像・音楽の呈示方法による比較：上記のように，映像・音楽を同時呈示するか継時呈示するかによって異なる認知処理が行われる可能性が示唆された。これら 2 種類のプロセスについて，さらに関連要因を統制した実験を重ね，その生起の有無や，生起に関わる要因について検討することが望まれる。

引用文献

谷口高士（1998）．音楽と感情 北大路書房